

## 澎湖群島発見の肥前磁器（訳 野上建紀）

著者	盧 泰康, 野上 建紀
雑誌名	金大考古
巻	61
ページ	3-4
発行年	2008-07-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/11036">http://hdl.handle.net/2297/11036</a>

## 澎湖群島発見の肥前磁器

盧 泰康 (訳 野上 建紀)

### 1. 澎湖群島馬公港発見の肥前磁器

澎湖群島は台湾海峡の東南方に位置する。中国福建地方の東、台湾の西方にあたり、古くから東アジア沿海航路の要衝であった。そして、馬公港は澎湖内海、澎湖本島の西側の馬公湾内に位置する。2005年4月中旬、馬公港の水底の浚渫作業が行われ、さらった海底の堆積物の中に宋元時代から近代に至るまでの大量の陶磁器が発見された。その中に17世紀後半に属する肥前の染付磁器が含まれていた。以下、それらについて個別に述べる。

染付芙蓉手皿、標本番号 MGG0150、復元後の高台径7cm、表面は灰色がかかった青みをおびた透明釉がかかっている。高台は浅くて薄い。見込みには草花文が入り、内側面には放射状に区画した文様が入れている。生産年代は1650～1670年代である。有田の外尾山窯や嬉野の吉田窯など外山の窯場に類例が見られる。海外の消費地遺跡ではインドネシアのパサールイカン遺跡<sup>(1)</sup>、フィリピンのマニラ・イントラムロス遺跡の出土遺物<sup>(2)</sup>などに類例が見られる。

染付雲龍見込み荒磯文碗、標本番号 MGG0505、復元高台径5.6cm。器形は丸碗であり、高台は細く、真っ直ぐ立ち上がっている。染付の発色は灰色がかかった藍色であり、外面には雲龍文の脚部が見られる。見込みが完全に残っており、いわゆる荒磯文(波濤文)が入れている。生産年代は1660～1680年代頃である。波佐見や有田周辺の窯場で生産されたもので、台湾の台南社内遺跡の出土品に類似する<sup>(3)</sup>。その他、ベトナム中部のホイアン遺跡<sup>(4)</sup>やタイのアユタヤ付近のチャオプラヤ川から採集された遺物<sup>(5)</sup>に類例が見られる。

染付草花文碗・坏、標本番号 MGG151、MGG502、器形は丸碗である。口部は直行する。

外面や見込みなどに草花文が入る。1650～1670年代に有田などで生産されたものである。

### 2. 明末鄭氏時代の澎湖群島と陶磁器中継貿易

1662年、鄭成功は台湾のオランダ人を駆逐し、ここを清朝に抵抗する主要な拠点とした。17世紀中頃以後、清朝政府が鄭氏の資金源を絶つことを目的に中国沿海における海禁と遷界政策を実施したことにより、沿海の海上貿易は極めて大きな影響を受けたが、それでも台湾の鄭氏が積極的に海外貿易に従事したことが記録にも見られる。:

別遣商船前往各港，多價購船料，載到臺灣，興造洋船，鳥船，裝白糖、鹿皮等物，上通日本；製造銅煩、倭刀、盔甲，並鑄永曆錢，下販暹羅、交趾、東京各處以富國，從此臺灣日盛，田疇市肆不讓內地<sup>(6)</sup>。

鄭氏の対外貿易の各種商品の内、陶磁器も重要な貿易品であった。台湾から出土する貿易陶磁や関連史料によって、台湾の鄭氏は一時期、中国沿海で陶磁器の密貿易を行うだけでなく、中国陶磁器以外の陶磁器(主に肥前磁器)の中継貿易も行っていた<sup>(7)</sup>。台湾海峡の東南に位置する澎湖諸島の海上船舶交通や軍事上の重要性は説明するまでもあるまい。永曆十八年(1664)三月、鄭成功の子鄭經が、中国沿海の各島を全面放棄し、台湾に退避する途上、将校の忠振伯や洪旭に澎湖諸島の实地踏査をさせている。以下は洪旭の報告である。:

(洪) 旭曰：澎湖乃臺灣門戶，上至浙江、遼東、日本，下通廣東、交趾、暹羅必由之路，當設重鎮，不可苟且。倘被占踞，則臺灣難以措手足。鄭經是之，就媽祖宮(現在の馬公)設立營壘，左右峙中置煙墩、砲臺……。<sup>(8)</sup>

この他、明末鄭氏時代の絵図〈永曆十八年臺灣軍備圖〉の中には、澎湖の馬公湾内に「天妃宮前好拋船」の一語<sup>(9)</sup>が付されている。当時の鄭氏の船舶の海上航運にとっての馬公湾の重要性を示している。

明末鄭氏時代の史料に見られる澎湖群島の状況に関する記録の大多数は軍事防衛や海戦に関するものであ

り、貿易状況に関するものはほとんどみない。馬公港の海底から引き揚げられた陶磁器の内、明末鄭氏時代あるいは17世紀後半に属する陶磁器の量は非常に多く、当時の馬公港付近海域における海上貿易の具体的な状況を反映している。肥前磁器以外に馬公港から引き揚げられた17世紀後半の陶磁器を見ると、福建地方で生産された製品が少なくなく、江西省景德鎮の貿易陶磁も含まれている。これらの製品は澎湖諸島の陸上の遺跡では台湾本島と同様に少なく、このことは馬公港が鄭氏の海上貿易ネットワークの中で経由地としての一定の役割を担っていたことを示している。

馬公港で発見された肥前磁器はいずれも1650～1680年代に属するものであり、染付見込み荒磯文碗などは台湾の台南新市社内遺跡で発見された遺物に類似している。その他、台湾南部で肥前磁器が発見されている遺跡は台南安平のゼーランディア城跡、台南市区明鄭墓葬、高雄鳳山舊城遺跡などがあり、馬公港発見の肥前磁器と類似した製品はインドネシア、フィリピン、ベトナム、タイなど東南アジア地域で見られる。

これらのことから澎湖諸島の馬公港海域は鄭氏の肥前陶磁貿易の経由地であったことがわかる。澎湖諸島は台湾海峡の海上交通の要衝に位置しており、毎年の季節風を利用した日本や東南アジアに向かう鄭氏の貿易船は、天候状況、積荷の転載、船への補給等の理由により馬公港に暫く停泊し、再び目的地に向けて出港することができた。そのため、澎湖諸島は鄭氏の海上貿易ネットワークの重要な結節点であったのである。

(本稿 2008年3月15日 脱稿)

※図版は原文「澎湖所見的肥前瓷器」と共通である。

## 註

- (1) 大橋康二 1990『海を渡った肥前のやきもの展』佐賀県立九州陶磁文化館：p. 97
- (2) 野上建紀 2005「ガレオン貿易と肥前磁器—マニラ周辺海域に展開した唐船の活動とともに」、『上智アジア学』第23号：p. 244、fig. 12、fig. 14。
- (3) 野上建紀、李匡悌、盧泰康、洪曉純 2005「台南出土の肥前磁器—17世紀における海上交易に関する考察—」『金大考古』No. 48：pp. 6-10
- (4) 菊池誠一編 1997『ベトナム日本町ホイアンの考古学調査』昭和女子大学国際文化研究紀要 Vol. 4：p. 43、図 23。
- (5) 大橋康二 1990「東南アジアに輸出された肥前陶磁」『海を渡った肥前のやきもの展』佐賀県立九州陶磁文化館：

pp. 158-160、図 362-371

- (6) (清) 江日昇 1984『臺灣外記』台北：臺灣大通書局：p. 237
- (7) 盧泰康 2006『十七世紀臺灣外來陶瓷研究—透過陶瓷探索明末清初的臺灣』台南：國立成功大學歷史學研究所博士論文(未出版)：pp. 212-246
- (8) (清) 江日昇 1984『臺灣外記』台北：臺灣大通書局：p. 231
- (9) 陳漢光、賴永祥 1957『北臺古輿圖集』台北：臺北市文獻會：p. 5